

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論文提出者	伊藤 知佐												
論文審査委員	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%; padding: 2px;">(主 査)</td> <td style="padding: 2px;">朝日大学歯学部</td> <td style="padding: 2px;">教授</td> <td style="padding: 2px;">堀田 正人</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">(副 査)</td> <td style="padding: 2px;">朝日大学歯学部</td> <td style="padding: 2px;">教授</td> <td style="padding: 2px;">土井 豊</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">(副 査)</td> <td style="padding: 2px;">朝日大学歯学部</td> <td style="padding: 2px;">教授</td> <td style="padding: 2px;">村上 幸孝</td> </tr> </table>	(主 査)	朝日大学歯学部	教授	堀田 正人	(副 査)	朝日大学歯学部	教授	土井 豊	(副 査)	朝日大学歯学部	教授	村上 幸孝
(主 査)	朝日大学歯学部	教授	堀田 正人										
(副 査)	朝日大学歯学部	教授	土井 豊										
(副 査)	朝日大学歯学部	教授	村上 幸孝										
論文題目													
審美的歯面コート材の表面性状と細菌付着性													
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>本論文は組成の異なる 2 種類の歯面コート材を用いて、表面粗さと光沢度および細菌付着との関係を検討したものである。歯科臨床では審美的および口腔衛生学的意義から仕上げ研磨により細かい傷を除去し、修復物表面を平滑化することが推奨されている。これは修復物表面の光の反射が低下し、光沢（艶）が無くなると、表面が曇って見え、審美的には好ましくないと考えられ、また、修復物表面に光沢を与えることは食物や細菌の付着を抑制すると考えられているからである。このように光沢度は表面性状の指標に用いられ、着色・歯垢の形成への影響に関与していると考えられている。そこで本研究では組成の異なる 2 種類の市販歯面コート材を用いている。S-PRG フィラー（約 48wt%）、Bis-GMA, TEGDMA を主成分とするビューティコート表面処理方法の違いにより、圧接群、研磨群、グロスエフェクト群を作製し、シリカフィラー、フッ化ナトリウム（約 31wt%）、UDMA, HEMA を主成分とするホワイトコートと表面滑沢材で多官能アクリレート、MMA を主成分とするトップコートを用いて圧接群、研磨群、トップコート群を作製し、非接触型粗さ測定装置による表面粗さの測定と光沢度および細菌付着との関係を検討したものである。</p> <p>その結果、サーマルサイクリング前後の各表面処理における 2 種類の歯面コート材の光沢度には有意差を認めなかったとしている。しかし、各表面処理の違いにより光沢度は有意に異なっており、圧接群、グロスエフェクト群、トップコート群、研磨群の順に光沢度は低下したことを明らかにしている。また、抗菌性試験の結果、2 種類の歯面コート材の抗菌性に有意差は認めらなかったが、細菌付着性試験の結果ではビューティコートの圧接群、研磨群が最も少ない細菌付着性を示し、ホワイトコートのトップコート群が最も多くの細菌を付着していたことを認めている。このように、表面粗さ (Ra) が 0.1 μm 以下で光沢度が 40~90% の歯面コート材における細菌付着性は表面粗さや光沢度の表面性状が影響するのではなく、歯面コート材の組成、特に S-PRG フィラーやフッ化ナトリウムが影響を与えている可能性を示唆している。</p> <p>以上のことから、審査委員は本論文が歯面コート材は歯科臨床において暫間的処置ではあるが、各種表面処理方法により表面を平滑化して光沢を与え、抗プラーク性を考慮した材料をコート材に添加することが審美的、口腔衛生学的意義から処置後の予後に有益に働くことを示し、歯科臨床に極めて価値のある所見を提供したものであり、博士（歯学）の学位を授与するに値するものと判定した。</p>													

